

読点に関する一考察

はじめに

本稿は読点の打ち方に関してささやかな考察を試みるものである。日頃、どこに読点を打つか、あるいは、打たないかに悩まされ、何かうまい法則はないものかと考え、読点の打ち方を説明した本を読み、いざ文章を書こうとすると、どうも書物で説明されているようにうまく行かない。それどころか、読点というものは一筋縄では行かないものだという感をいっそう強くする。そこで読点の打ち方のせめて一端でも明らかにしたいと願ってこの考察を試みるにいたった。なお、ここで言うところの文章とは、我々が日頃、自らの考えなり意向なりを他者に伝達しようとする文章であって、決して文学的なそれではないことを断っておきたい。また、考察の材料として諸家の文章・新聞記事（見出しも含めて）等を使わせていただくが、考察の性格上、とりあげる文が複数の修飾部を含むものが主となるのは当然の帰結である。単文においては読点の打ち方はさほど問題にならないだろうからである。

読点は強調のために用いられることがあるが、ここでは論理を明確に

阿 満 誠 一

(一九九四年九月一七日受理)

するための読点に限って考える。引用文をもとに、読点を打つ場所、打つべきでない場所を考えて行くが、読点以外のものが読点と同じ、もしくはそれに近い働きを持つことも明らかにしてみたい。というのは、できるだけ読点の使用数を少なくするという基本姿勢でこの考察を進めるからである。読点の多用は文意を明瞭にするより、読者にわずらわしさを感じさせることのほうが多いと思われる^①。

なお、句点の打ち方については考察の対象としない。句点をどう打つか、あるいは打たないかで迷うのはせいぜい次のような場合に限られるだろうからである。

有名願望ここにありとでも言いたいようなものですが、もはやここでは「有名」という言葉の重みがまるでちがっているわけですね。バルザックの言う「名の特権」は「栄えある栄光」とひとつのもの、その名の輝きのほどは、現代のように軽薄なミーハー人気とはおよそスケールがちがっています。

(山田登世子『有名人の法則』)

例文では「『栄えある栄光』とひとつのもの」の後に読点が付されているが、「『栄えある栄光』とひとつのもの」で切って、「ひとつのもの。」と句点を打ってもさしつかえない。しかし、どちらでも、誤読を招くおそれはない。

適切に読点が打たれていない文章は読みにくいし、誤読を招くおそれがある。

① 新八郎はいまにして色部又四郎の家と主君の間にはさまっての苦衷が少しわかるような気がした。 (森村誠一『忠臣蔵』上)

② みちのくを愛し、中尊寺貫主をつとめた直木賞作家が栄華をきわめ、やがて滅んだ藤原一族の歴史と人間模様を雄渾に描く。

(朝日新聞朝刊・一九九三年四月二日)

例文①は、読点が施されていないために、誤読のおそれ、あるいは解りにくさが生じた例である。文字を一字ずつ追いながら文章を読むのでない我々は、読点の打ってある箇所までを一つのまとまりとして読む。読点が施されていないということは、一息で読むよう要求されているということである。もし作者にその意志がなくとも結果的に読者は一息に読もうと努力する。しかし、これを一息で読み下すにはよほど息が長く続かないと無理であろうし、かりに読めたとしても一読して文意を正確に把握するのは困難であろう。普通はどこか途中で一息も二息もつ

くのではないだろうか。ところが、この文章の場合は息をつくべき箇所を作者が指定していない。いきおい読者は自らの息の長さに応じて一息つくことになる。その時、たとえば、「新八郎はいまにして色部又四郎の家と」で一息つく読者がいても不思議ではあるまい。現に、筆者が行なった調査では一五名のうち四十名が「家と」の後に読点を打った。^② 「色部又四郎の」が「家」を修飾するのでなく「苦衷」を修飾する以上、少なくとも「色部又四郎の」の後に読点を打って、

新八郎はいまにして色部又四郎の、家と主君の間にはさまっての苦衷が少しわかるような気がした。

とする必要がある。 「色部又四郎の」と「家」を分かって、かかり受けの関係を明確にする必要がある。読点のもつ「分かつ」働きは必要に応じて利用されねばならない。

例文②は、示された読法に忠実に従って読めば、「栄華をきわめ」たのは「中尊寺貫主をつとめた直木賞作家」であり、「栄華をきわめ」た後しばらくしてから(「やがて」)、滅亡した「藤原一族の歴史と人間模様を雄渾に描く」ことになる。もしくは、「やがて」が「滅んだ」を修飾し、「やがて」はいつを起点にしたものか不明瞭になる。例文は、今東光の著書『奥州藤原氏の栄光と挫折』の宣伝文である。書名から判断できるように、「栄華をきわめ」たのは「直木賞作家」ではなく「藤原一族」なのである。それを明瞭に示すには、「直木賞作家」の後に読点が必要である。そのように読点を打ってみると、

イ みちのくを愛し、中尊寺貫主をつとめた直木賞作家が、栄華をきわめ、やがて滅んだ藤原一族の歴史と人間模様を雄渾に描く。

となるが、「栄華をきわめ」たのが「直木賞作家」であると読まれるおそれには完全には消滅していない。誤読を避けるためには、

ロ ^A みちのくを愛し中尊寺貫主をつとめた直木賞作家が、^B 栄華をきわめやがて滅んだ藤原一族の歴史と人間模様を雄渾に描く。

と改めたほうがよい。「直木賞作家が」までと「栄華をきわめ」以下とを読点に分かったために、誤読のおそれが消滅したといえる。イに誤読のおそれが残るのは分かち過ぎたためである。ロのAとBはそれぞれ大きなまとまりを形成している。その二つを区別するために両者の間に読点を打ったのであるが、更に、Aの中を「みちのくを愛し」と「中尊寺貫主をつとめた」に分ち、Bの中を「栄華をきわめ」と「やがて滅んだ」に分けたために、大きなまとまりを分かち、小さなまとまりを分かち、a・cの読点との差異が消滅して結局読点を打たない状態に近付いたのである。これがたとえば「みちのくを愛し中尊寺貫主をつとめた直木賞作家」という文であれば「みちのくを愛し、中尊寺貫主をつとめた直木賞作家。」としてもいっこうさしさわりはない。「栄華をきわめ、やがて滅んだ藤原一族。」も同様である。しかしイのような文章にすると、どの読点も同じく分かち働きをするために、最も重要なbの読点の力が弱められてしまう結果になる。

二

ところで「分かち」働きをしているのは、はたして読点自身だろうか。次の例を見てみよう。

一 徳川實紀は家康以來家治に至る江戸幕府將軍の實紀にして、一代ごとく將軍の言行逸事等を別叙し之を附録とせり、大學頭林衡總裁の下に成島司直旨を奉じて撰述し、文化六年に稿を起し、嘉永二年に至りその功を成したり、總じて之を御實紀と稱し、各代將軍の廟號に因りて題し、東照宮御實紀を始め、台徳院殿御實紀以下、徳川院殿御實紀に終る、今こゝに徳川實紀といへるは、世に行はるゝ通稱に従ふなり、一本書は舊輯續國史大系にその第九卷より第十五卷まで七篇に分收せしが、今之を十篇とし、本巻は第一篇として、舊輯續國史大系第九卷の中、御實紀成書例に始まり、徳川氏の出自家康の幼時より二代將軍秀忠の實紀慶長十九年に至るまでを收め、以て新訂増補國史大系第卅八卷となし、こゝに之を公刊す。

(國史大系『徳川實紀』第一編・凡例)

一見して解るやうに全体がベタ組みに見えて、まとまりを視認することは極めて困難である。ここでは読点に分かつ働きをしているとは言いがたい。それは読点に一マス分の空白が与えられていないからにはかならない。ということ、分かち働きをするのは読点自身ではなく、読点によって確保された空白だということになる。分かちという、空白の働きを利用して例としては、小学校低学年の国語教材・外国人むけの日本語初歩の教材などが挙げられるが、より身近なものとしては新聞のつぎのような見出しがある。

「投棄停止近く発表」

被爆者証言 受け入れろ

もちろん、われわれが日常書く文章の中で空白を読点のかわりに用いることなどできるはずもないが、読点自身が「分かっ」働きを有しているのではないとすれば、「分かっ」働きを有する他のもの、しかも我々が文章の中で用いるものが読点の代用をしていることはないだろうか。次に掲げる例文でそのことを考えて見る。

③ 桑原武夫の『文章作法』（初刊昭和五十五年、潮出版社）は「ものを書くことの素人ばかり」を対象とした文章教室での講義をまとめたものだが、今までの作文術の本につきものだった文学趣味からきっぱりと袂をわかつとうとする姿勢が、この講義のいちじるしい特徴をなしている。
（向井敏『書斎の旅人』）

この文章の一行目の「潮出版社」は「までは決して短いとは言えず、かつ、主部をなしているので読点を打ちたくなくなるところであり、また、打ってもかまわない箇所であろうが、なくても読みづらくないのは、「ものを書く」の頭にあるかぎかつこが、その前後を分かっているからにはかならない。かぎかつこを除いて、

桑原武夫の『文章作法』（初刊昭和五十五年、潮出版社）はものを書くことの素人ばかりを対象とした文章教室での講義をまとめたものだが、……

として見ればそのことははっきりする。かぎかつこがないのなら、

④ 桑原武夫の『文章作法』（初刊昭和五十五年、潮出版社）は、ものを書くことの素人ばかりを対象とした文章教室での講義をまとめたものだが……

とした方が、よりわかりやすい。

同様の例をもう一つ挙げる。

叙述の筋を途中で切るといふ趣旨では《黙説》ないし《中断》に似ていることばのあやの型が、もうひとつある。

（佐藤信夫『レトリック認識』）
この例文では「趣旨では」の後に読点がないが読みづらさは感じられない。もちろんあっても差し障りはない。

これらの記号はもちろん、読点と全く同じ働きを有するものとは言いがたい。例文③と例文④を比較してみればわかるように、分かっ力は読点の方が強いと判断されるからである。ただ、読点の働きに近いに働きをするといふことは言える。記号という、文字とは異種の符号が文字と文字の連続感を断つからであろう。

三

連続感を断つ働きを有するのは必ずしも文字の中の記号だけではな

い。本多勝一氏は、「漢字とカナを併用するとわかりやすいのは、視覚としての言葉の『まとまり』が絵画化されるため」だとして、漢字と「カナ」の併用が、分かつ働きを有することを指摘しておられる。^④今そのことを谷崎潤一郎の『春琴抄』の文章で検証してみる。

おしやべりしをないから邪魔にならぬからといふのが果して春琴の眞意であつたか佐助の憧憬の一念がおぼろげに通じて子供ながらもそれを嬉しく思つたのではなかつたか十歳の少女にさういふことは有り得ないとも考へられるが、俊敏で早熟の上に盲目になつた結果として第六感の神経が研ぎ澄まされてもゐたことを思ふと必ずしも突飛な想像であるとはいへない氣位の高い春琴は後に戀愛を意識するやうになつてからでも容易に胸中を打ち明けず久しい間佐助に許さなかつたのである。さればそこに多少の疑問はあるけれども兎に角始め佐助といふものゝ存在は殆ど春琴の念頭にないかの如くであつた少くとも佐助にはさう見えた。

極端なまでに句読点が省略されている文章である。谷崎は『文章読本』で『春琴抄』の句読法に触れて「私の點の打ち方は、一、センテンスの切れ目をぼかす目的、二、文章の息を長くする目的、三、薄墨ですら／＼と書き流したやうな、淡い、弱々しい心持を出す目的等を、主眼にしたのであります。」と述べている。どの目的も句読点を省略することをその手段としていると判断してよいが、「センテンスの切れ目」がぼけているといふ印象は受けるものの、かかり受けの關係でひどく迷うことはない。一息つく箇所が示されていないのに息苦しくない。それはなぜか。そういう意識のもとに改めて読んで見ると明らかにすることであるが、

通常、句読点を打つであろうと思われる箇所は大抵ひらがな表記から漢字表記に変わっているのである。これは、本多氏の指摘にあるように、表記の形態が異なることが「分かつ」働きをしていることを物語るものである。『春琴抄』は、ひらがなと漢字をうまく混ぜあわせることによって読点を少なくすることができることを示唆している。ひらがなとカタカナ、カタカナと漢字に関しても同じことが言えよう。

終わりに

句読点で悩まないですむ最良の方法は、一文を短くすることである。それを明らかに示すのが、次の例であろう。

俳優の渡辺美佐子さんは少女のころ長野に疎開していた。戦争末期の飢えの時代である。ある日どう工面したのか母がカレーライスをつくり始めた。「できたわよ」の声に少女は土間にかけおりてナベを持った。喜びに体がはみげたの足がもつれて転んだ。カレーは残らず土間に流れた。^⑤

意図的に読点が省いてあるが、さほど読みにくくないのは、何よりも一文が短いからであろう。加えて、ひらがな・カタカナ・漢字の効果的な混用も指摘できる。しかし我々は短い文章だけで自らの思想を他者に伝えることは困難である。伝えたい内容が複雑になればなるほど、一文は長くなるざるを得ない。その時、ここで考察したように、読点以外にも「分かつ」働きを有するものが存在することを念頭に置くことは決して無駄ではないと考えられる。

注

① たとえば次のような文章である。

「私は、そつと妻のいろいろな寫眞類をしまつてある、筆筒の引き出しを調べてみた。その中には、以前、まだ私たちの間がそんなに三角のもつれた關係にならない時分にゆめ子にも、妻にも、私がまだ單なる客であつた時分に、そのどちらからも、その折り折りに貰つた二三枚づつの寫眞があつて、それが妻の筆筒の引き出しにはひつてゐる筈なのである。ところが、今、それを調べてみると、妻の寫眞は現にそこにあるのに、もう一人の女の方のは、三枚あつた三枚とも、いくら探しても見あたらずである。私は、そこで、初めて、はつきりと、本箱の奥に隠しておいた、私が寫して來たゆめ子の寫眞を、妻にいつの日か發見された事を知つたのであつた。」

(宇野浩二『夢見る部屋』)

② 調査の対象にしたのは本学の学生一一五名であり、年齢構成は次表のごとくである。調査は、「次の文章に読点を打つとしたら、あなたはどこに打ちますか。文章の中に書き込んで下さい。打つ読点の数に制限はありません。」という前書きのもと例文①を掲げた。

年齢	人数
32	1

23	1
22	4
21	13
20	20
19	47
18	29

③ 参考までに読点が打たれた箇所と個数を示す。

新八郎は^aいまにして色部又四郎の家と^b主君の間には^cさまつての^d苦衷が^e少しわかる^fような気がした。^g
^h

箇所	個数
a	74
b	52
c	5
d	40
e	3
f	12
g	75
h	4

④ 『日本語の作文技術』(朝日新聞社・刊)第5章 漢字とカナの心理。なお、同書では、読点の打ち方の原則について、極めて合理的で説得力に富む論が展開されている。

⑤ 岡崎洋三『日本語とテンの打ち方』(晩聲社・刊)に掲載されているものを借用した。